

## 第 34 話＜最初の水田＞の要約と参考資料

### 第 34 話＜最初の水田＞の要約

1609 年の検地のとき、土呂久に田はありませんでした。当時の耕作地は、焼畑のあと斜面を平らにし畝を立てて堆肥を与える「畑」、傾斜のままの「山畑」、草場にして飼料を採取する「切野」でした。1732 年の検地で、3 か所に湧水を使った最初の水田が記載されました。

### 第 34 話＜最初の水田＞の参考資料

#### 34-1 焼畑（ヤボ作）

佐藤仲治さんの話（1980 年 3 月 17 日聴取）

ヤボ作は、木や草、竹なんか立っちょるとを伐採してしもて、3~4 か月横わせておくと枯れるから、そうしてみな焼く。しばらくは、焼いた灰が肥やしになる。5~6 年はようできる。それから自然とできんごつなる。根っこなんかそのまま。

トーキビは 20 センチ間隔を置いて、トンガ（小さい）でちょっと、種が入るくらいの穴を掘って、4 粒ずつ蒔いていく。男衆が掘って、女衆が種をまいて土をかぶせていく。それで、けっこうできよった。30 センチくらいに育ったころ、いっぺん草を取りに行つて、まわりの土をトーキビの根に寄せて歩く。肥料もなんもいらん。それだけで実がつく。4~5 反でトーキビの 40 俵くらいとれよった。160 カルイとったことがある。トーキビだけで。

ヤボでやるのは、たいがいトーキビ。土呂久の土地は、トーキビがでくるとよ。トーキビが昔は常食。戦後、自分とこで食べて、牛にやる。残りを売る。石臼、水車で割つて、トーキビの粉にしたあと牛にやった。

佐藤福市さんの話（1980 年 3 月 21 日聴取）

畑の少ない人は、手入れずにできるのでやった。トーキビでも、大豆、小豆でも植える。トーキビを 2~3 年植えれば、畑のようになる。だいたい畑んごつなったら、大豆でも小豆でもできる。5~6 月ごろ、草が青みがかると、掘っていけてしまう。その草が肥やしになる。トーキビは、草をいけるとき、<sup>うね</sup>畝をつくる。深く掘り下げて、畝を作らんでも、ふつうの草をいければいい。ヤボ作は難しゅうない。素人でもできる。小さい草ができれば取つてさるく。草がいみつたら、また掘っていけてもよい。

佐藤実雄さんの話（1987 年 8 月 13 日電話で聴取）

ヤボを伐つたあと、天気がいい日に干して、焼けるなというところを見計らつて、風のない日に、頭（山の上の方）から点々と火を点けて焼いた。下から火を点けると危ない

ですわ。周囲をきれいに掃除しておかねば——。炎がどんどん上がって、煙も青黒いやつがどんだんのぼる。午後3時ごろから4時ごろに火を点けたが、その前に駐在所に「こうして焼きます」と届けを出した。戦争中から戦後にかけて、食料の少ないときは、山あいで盛んに煙がたちのぼった。

時期によって、トーキビヤボとか大根ヤボトカ、ソバヤボと言っていた。

### 34-2 山畑（畠）と切野

藤寺非宝「岩戸村田成開発史」P5~6

（岩戸竿帳に）山畠、切野とあるものは殆んど青山作であって、原始的に山野を切り開いて転々と年を隔てて作毛したものと見え、当地の原野にはどこもかしこも掘り開きの段々が残って居るが、これは昔の人が如何に苦心して農作したかを物語る証拠である。本郡は土地が誠に肥えて居るので、初作の地、新開きの処は農作物が実によく出来る。しかし、連年作毛したならば不毛となる故、良処を追ふて穀物を作り歩いたものである。

九州経済調査協会「高千穂地方における原野総合開発利用調査」（1262年3月）

固定化された畑の場合の地力維持は、他からの有機質の供給にまたねばならない。ここに有機質供給源としてぼう大な採草地＝原野が必要となる。つまり山の一部をさらに原野として利用せねばならなかったのである。原野の野草を有機質に分解して畑に供給するためには、有機質の分解を促進させる媒体としての家畜の飼養——糞尿が不可欠の要素となる。

佐藤全作さんの話（1983年12月14日聴取）

（全作さんに、検地帳では「畠」のほかに「山畠」「切野」とあるのだが、これは何をさしているのだろうか、と問いかけると、しばらく考えたあとで）

「山畠」とは焼畑のことじゃろな。「切野」という言葉は、今はないが、山を切って草場にしてあるところ……「原野」、カヤ屋根のカヤを育てたり、牛の飼料を育てたりするところ。いま現在の「刈り干し場」のことじゃろな。つまり畑以外の原野。山を切って1回焼畑にしたあとじゃないと、ふつうは草場にはならん。それが「切野」。

小寺鉄之助「宮崎県山林沿革資料」P450~

往古ヨリ山畑或ハ伐野ノ名称ヲ以テ納税シ、各自進退ヲ自由ニシタルモノ、及旧藩中青山払下、或ハ賞与トシテ下附セラレ、爾来納租セシ土地ヲ民有トス。尤納税セシ確証タルヤ各村現存ノ検地帳ニ伐野山畑トアリ、此ノ伐野山畑ハ目下多ク山林原野ニ属ス。（略）御割付帳ニ真綿、柿木、漆、渋、茶、木附子、<sup>きぶし</sup>渋紙等ノ現品又ハ代銀納アリテ、何レモ山野税ヲ収入シタルノ証ナリ。（略）

殊ニ伐野ノ如キハ所謂切替畑ナリ。然ルニ畑地ト同様反ニ式斗納税セシメタルヲ以テ観レバ、大ニ反別ニ余裕ヲ与ヘ、而シテ租税ヲ一定シタルモノト思考至サレ候。

ブリタニカ国際大百科事典（インターネットより）

#### 切替畠

日本における焼畑の一呼称で、薙畑（なぎはた）、切畑山、切（伐）畑とも称される。森林を伐採したあと畑地として利用し、地味が衰えると一定期間休閑する畑。焼畑を火耕による移動性耕地、切替畑を火耕によらない移動性耕地とする説があるが、実際には焼畑と同義に使われている。無税地の内伐畑と課税地の外伐畑とに区別された。切替畑は近世初期の検地帳から記載されており、山間地域の重要な土地利用形態であった。中国、九州や中部の山地では 1955 年頃まで行われていた。

平凡社版世界大百科事典（インターネットより）

#### 山畑

日本近世における地目の一つ。山方にある生産力の低い畑。太閤検地の検地条目では、山畑については統一的な石盛（こくもり）をつけることはせず、実態に応じて石盛を付すことが指示されているが、通常は下々畑よりも低い石盛がつけられた。野獣の被害も大きい土地であったが、山畑とは名目ばかりで作物は植えず、薪炭の供給地として利用されたり、植林が行われた地域もあった。

川原一之「土呂久にみる殉農の意識」（宮崎および他の地域における文化落差に関する総合的研究所収）

慶長検地における土呂久の耕作地は、畠 6 町 8 畝 22 歩（上畠 5 反 3 畝 23 歩、中畠 1 町 3 反 3 畝 7 歩、下畠 4 町 2 反 1 畝 22 歩）、山畠 5 町 4 反 9 畝 14 歩、切野 1 町 8 反 2 畝 10 歩、総計 13 町 4 反 16 歩となっている。「畠」は常畑、「山畠」は焼畑、「切野」は焼畑にした跡の草場のことで屋根をふく茅や牛馬の飼料を採取した。江戸時代初期の土呂久は、農耕の中心が焼畑から常畑へ移行する段階とみられ、水田はまったく開かれていない。

#### 34-3 土呂久でいちばん古い田

佐藤三代士さんの話（1983 年 1 月 28 日聴取）

土呂久で一番古い田は、畑中の下、道路の下の川端に「タクボ」という所があって、そこに 1 枚か 2 枚、昔の田がある。何畝もない。藁をもらいに行くというて、みんな、田植えの手伝いにいったりした。草履をつくるのに、藁がいるので加勢にでた。

佐藤正四さんの話（1982年12月24日聴取）

裏の用水が、岩戸村に二つしかないといわれた用水の一つだった。岩戸村の者が、井戸さらい（修理）に役目で来よった。これと、永の内の用水が、岩戸村でいちばん古い。

佐藤藤太さんの話（1983年1月30日聴取）

畑中川から引いた用水は、役所の字図にのつとるから古い。用水というほどのものではないが……。

### 34-4 明治初期の土呂久の新開田

明治4（1871）年岩戸村未改見取田小前帳（藤寺非宝「岩戸村維新以前田成開発史」P39）

土路久門

脇川端

一、見取田 二畝三步 小笠原類治

堂の前

一、見取田 六歩 佐藤繁弥

橋詰安政三辰改佐藤筆弥受見取田拾歩の続

一、見取田 十二歩 佐藤筆弥

作蔵藪

一、見取田 十三歩半 佐藤三木蔵

向脇安政三辰改佐藤銀蔵受見取田四十五歩の続

一、見取田 十二歩 佐藤銀蔵

松葉

一、見取田 十六歩 佐藤栄太郎

作蔵藪慶応二寅改佐藤竹五郎受見取田一畝六歩之続

一、見取田 十四歩 佐藤竹五郎

脇の川向安政三辰改佐藤要吉受見取田二畝二十四歩之続

一、見取田 八歩 佐藤要吉

田久保

一、見取田 一畝三步 佐藤源次郎

屋敷浦

一、見取田 二畝二十五歩半 佐藤栄八

中つる

一、見取田 二畝三步 佐藤菊治

屋敷の脇慶応二寅改佐藤庄吉受見取田一畝六歩之続

一、見取田 二十歩 佐藤庄吉

下毛田下

一、見取田 一畝二十四歩 佐藤数蔵